

10.16 [火]

第616回 名曲シリーズ
サントリーホール/19時開演
Popular Series, No. 616
Tuesday, 16th October, 19:00 / Suntory Hall

指揮/ジョヴァンニ・アントニーニ Conductor GIOVANNI ANTONINI P.7

ヴァイオリン/ヴィクトリア・ムローヴァ Violin VIKTORIA MULLOVA P.10

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ハイドン 歌劇〈無人島〉序曲 [約8分] P.13
HAYDN / "L'isola disabitata" Overture

ベートーヴェン ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61 [約42分] P.14
BEETHOVEN / Violin Concerto in D major, op. 61
I. Allegro ma non troppo
II. Larghetto
III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第2番 ニ長調 作品36 [約32分] P.15
BEETHOVEN / Symphony No. 2 in D major, op. 36
I. Adagio molto - Allegro con brio
II. Larghetto
III. Scherzo : Allegro
IV. Allegro molto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会
平成30年度(第73回)文化庁芸術祭協賛公演



10.20 [土]

第211回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Saturday Matinée Series, No. 211
Saturday, 20th October, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮&リコーダー/ジョヴァンニ・アントニーニ
Conductor & Recorder GIOVANNI ANTONINI P.7

マンドリン/アヴィ・アヴィタル Mandolin AVI AVITAL P.10

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ヴィヴァルディ ドレスデンの楽団のための協奏曲
ト短調 RV577 [約10分] P.16
VIVALDI / Concerto in G minor "Per l'orchestra di Dresda", RV577
I. Allegro II. Largo non molto III. Allegro

ヴィヴァルディ マンドリン協奏曲 ハ長調 RV425 [約7分] P.17
VIVALDI / Mandolin Concerto in C major, RV425
I. Allegro II. Largo III. Allegro

J.S. バッハ マンドリン協奏曲 ニ短調 BWV1052 [約24分] P.18
J. S. BACH / Mandolin Concerto in D minor, BWV1052
I. Allegro II. Adagio III. Allegro

[休憩 Intermission]

ヴィヴァルディ リコーダー協奏曲 ハ長調 RV443 [約12分] P.17
VIVALDI / Recorder Concerto in C major, RV443
I. Allegro II. Largo III. Allegro molto

ハイドン 交響曲 第100番 ト長調 〈軍隊〉 [約24分] P.19
HAYDN / Symphony No. 100 in G major "Military"
I. Adagio - Allegro
II. Allegretto
III. Menuet : Moderato
IV. Presto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[共催] 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

平成30年度(第73回)文化庁芸術祭協賛公演



10.22 [月]

第19回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール/19時30分開演(19時00分から解説)
Yomikyo Ensemble Series, No. 19
Monday, 22nd October, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00)/Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

ヴァイオリン/日下紗矢子 (読響特別客演コンサートマスター)
Violin SAYAKO KUSAKA (YNSO Special Guest Concertmaster)

チェンバロ/北谷直樹 Harpsichord NAOKI KITAYA

ナビゲーター/鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

ビーバー バッターリア [約10分]
BIBER / Battalia

J. S. バッハ ブランデンブルク協奏曲 第5番
ニ長調 BWV1050 [約21分]

J. S. BACH / Brandenburg Concerto No. 5 in D major, BWV1050

- I. Allegro
- II. Affettuoso
- III. Allegro

[休憩 Intermission]

バルトーク 弦楽のためのディヴェルティメント Sz.113 [約24分]
BARTÓK / Divertimento Sz. 113

- I. Allegro non troppo
- II. Molto adagio
- III. Allegro assai



文化庁委託事業「平成30年度 戦略的芸術文化創造推進事業」
[主催] 文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

10.26 [金]

第582回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演
Subscription Concert, No. 582
Friday, 26th October, 19:00 / Suntory Hall

指揮/鈴木雅明 Conductor MASAOKI SUZUKI P. 8

ソプラノ/リディア・トイシャー Soprano LYDIA TEUSCHER P. 11

テノール/櫻田 亮 Tenor MAKOTO SAKURADA P. 11

合唱/RIAS室内合唱団 Chorus RIAS Kammerchor P. 12

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

J. M. クラウス 教会のためのシンフォニア ニ長調 VB146 [約9分] P. 20
J. M. KRAUS / Sinfonia per la Chiesa in D major, VB146

モーツァルト 交響曲 第39番 変ホ長調 K.543 [約29分] P. 21
MOZART / Symphony No. 39 in E flat major, K. 543
I. Adagio - Allegro II. Andante con moto
III. Menuetto : Allegretto IV. Allegro

[休憩 Intermission]

メンデルスゾーン オラトリオ〈キリスト〉 作品97 [約21分] P. 22
MENDELSSOHN / Christus, op. 97
I. キリストの誕生 II. キリストの受難

メンデルスゾーン 詩篇 第42番
〈鹿が谷の水を慕うように〉 作品42 [約26分] P. 23
MENDELSSOHN / Psalm 42 "Wie der Hirsch schreit", op. 42
I. 合唱 II. アリア III. 叙唱と合唱 IV. 合唱 V. 叙唱 VI. 五重唱 VII. 終合唱

※当初発表したものから曲順が一部変更されました。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団
ゲーテ・インスティテュート

[協力] アフラック
[後援] 日本メンデルスゾーン協会
平成30年度(第73回)文化庁芸術祭参加公演



11.23 [金・祝]

第107回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール/14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 107
Friday, 23rd November, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮/デニス・ラッセル・デイヴィス Conductor DENNIS RUSSELL DAVIES P. 9

チェロ/ハリエット・クリーフ Cello HARRIET KRIIGH P. 12

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ニールセン 歌劇〈仮面舞踏会〉序曲 [約5分] P. 27
NIELSEN / "Maskarade" Overture

エルガー チェロ協奏曲 ホ短調 作品85 [約30分] P. 28
ELGAR / Cello Concerto in E minor, op. 85

- I. Adagio - Moderato
- II. Lento - Allegro molto
- III. Adagio
- IV. Allegro - Moderato - Allegro, ma non troppo - Poco più lento

[休憩 Intermission]

シベリウス 交響曲 第1番 ホ短調 作品39 [約38分] P. 29
SIBELIUS / Symphony No. 1 in E minor, op. 39

- I. Andante, ma non troppo - Allegro energico
- II. Andante (ma non troppo lento)
- III. Scherzo : Allegro
- IV. Finale (Quasi una fantasia) : Andante - Allegro molto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会

[協力] 横浜みなとみらいホール

平成30年度(第73回)文化庁芸術祭協賛公演



Maestro of the month

ジョヴァンニ・アントニーニ

Giovanni Antonini

興奮のタクトとリコーダー
鬼才、待望の初登場



©David Ellis

斬新な演奏で注目を浴びる古楽界の鬼才が読響初登場。ベルリン・フィルとの名演も話題になったベートーヴェンや、得意のハイドンなどを取り上げる。ヴァイヴァルディでは自らリコーダーも披露し、スリリングな時間に拍車をかけるだろう。

1965年イタリアのミラノ生まれ。ミラノ市立音楽院及びジュネーヴ古楽音楽院に学ぶ。89年に古楽団体“イル・ジャルディーノ・アルモニコ”を創設。斬新な解釈による激しい演奏で、バロックや古典派音楽に“革命”をもたらした。同団体では指揮者としてのみならず、リコーダーやフラウト・トラヴェルソの奏者としても活躍している。現在、モーツァルテウム管とバーゼル室内管の首席客演指揮者を務める。

古楽界で注目を浴びるのみならず、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘ

ボウ管、バイエルン放送響、シカゴ響、ベルリン・コンツェルトハウス管など一流のモダン・オーケストラにも数多く客演。オペラでもミラノ・スカラ座、チューリヒ歌劇場、ザルツブルク音楽祭などに出演している。

ハイドンの生誕300周年に向け、その全交響曲を録音する企画「ハイドン2032」をイル・ジャルディーノ・アルモニコ及びバーゼル室内管とともに進行中である。

- ◇10月16日 名曲シリーズ
- ◇10月20日 土曜マチネーシリーズ
- ◇10月21日 日曜マチネーシリーズ

鈴木雅明

Masaaki Suzuki

古楽界の世界的巨匠
15年ぶりの共演

雄弁かつ透明なサウンド、曲の本質に迫る演奏アプローチで、高い評価を得ている世界的巨匠。2003年以来、実に15年ぶりに読響の指揮台に立つ。J.S. バッハとともに力を注いでいるメンデルスゾーン作品で、どんな荘厳な世界を作り出してくれるだろうか。

東京芸術大学作曲科及びオルガン科、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に学ぶ。1990年にバッハ・コレギウム・ジャパンを創設以来、バッハ演奏の第一人者として名声を博す。同グループを率いて欧米の主要なホール、音楽祭にたびたび登場しており、極めて高い評価を積み重ねている。近年は海外のバロック・アンサンブルへの客演に加え、ベルリン・ドイツ響、ボストン響、ニューヨーク・フィル、チューリヒ・トーンハレ管などモダン・オーケストラも指揮し、多彩なレパートリーを披露している。



©Marco Borggreve

2001年ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章、11年紫綬褒章を受章。12年ドイツ・ライプツィヒ市より国際的なバッハ演奏貢献に対して「バッハ・メダル」、また、ロンドン王立音楽院・バッハ賞を受賞。13年度サントリー音楽賞をバッハ・コレギウム・ジャパンとともに受賞。東京芸術大学に古楽科を設立し、2010年まで20年間にわたり教鞭を執った。現在、イェール大学アーティスト・イン・レジデンス、シンガポール大学ヨン・シウ・トウ音楽院客員教授、神戸松蔭女子学院大学客員教授、東京芸術大学名誉教授を務める。

◇10月26日 定期演奏会

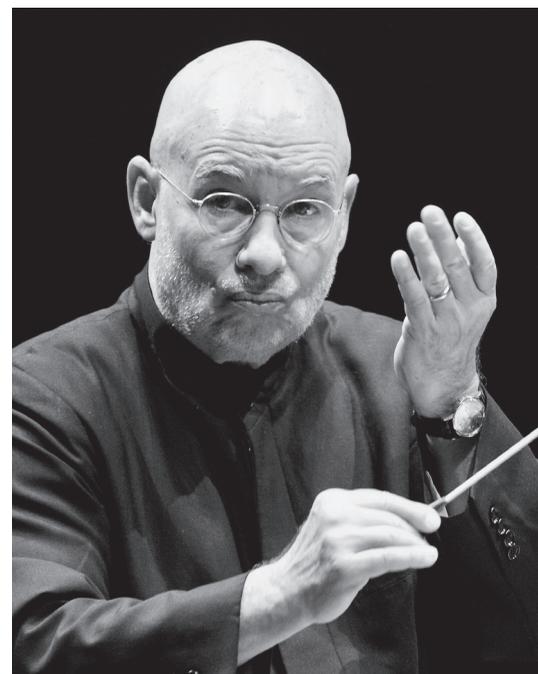
デニス・ラッセル・デイヴィス

Dennis Russell Davies

アメリカの名匠が魅せる
シベリウスとエルガー

オペラとコンサートの双方で活躍するアメリカの名匠が、3年ぶりに読響に登場。シベリウス若き日の秀作などで熟達の腕を振るう。豊かな表現力に期待したい。

1944年アメリカ生まれ。セントポール室内管音楽監督を振り出しに、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督、リンツ・ブルックナー管の音楽監督、シュトゥットガルト室内管、ウィーン放送響、スイス・バーゼル響の首席指揮者などを歴任し、現在はチェコ国立ブルノ・フィルの芸術監督及び首席指揮者を務めている。これまでに、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、サンクトペテルブルク・フィルなど世界の一流楽団を指揮。オペラ指揮者としてもメトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座、ウィーン国立歌劇場などで活躍するほか、ザ



©読響

ルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭にも出演している。ハイドンなどの古典派からブルックナー、ストラヴィンスキー、さらにはフィリップ・グラスまで幅広いレパートリーを誇る。特に現代音楽の分野では数々の世界初演を手掛けており、近年ではリンツ州立劇場でグラスの歌劇〈迷える者の跡〉の世界初演を成功に導いた。

録音はハイドン、ブルックナー、グラスの交響曲全集のほか、ホルストの〈惑星〉やストラヴィンスキーの管弦楽作品集、現代オペラなどを行っている。

◇11月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



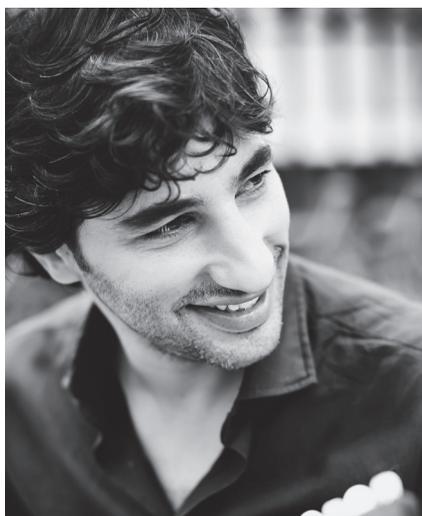
©Henry Fair

ヴァイオリン ヴィクトリア・ムローヴァ

Violin Viktoria Mullova

上品な音、完璧な技術、深い知性を兼ね備えた現代最高峰のヴァイオリニスト。シベリウス国際コンクール、チャイコフスキー国際コンクールで優勝。これまでにアバド、マゼール、ラトルらの指揮でウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ボストン響などと共演し、ザルツブルクをはじめとする数々の音楽祭に出演。バロック音楽にも造詣が深く、「イル・ジヤルディーノ・アルモニコ」ら古楽団体ともしばしば共演している。フィリップスやオニックス・レーベルなどから多数のCDをリリースし、好評を博している。読響とは2016年以來2度目の共演。

◇10月16日 名曲シリーズ



©Peter C. Theis

マンドリン アヴィ・アヴィタル

Mandolin Avi Avital

卓越したカリスマ性と技巧で世界的に活躍する“マンドリンのプリンス”。「絶妙にセンシティブな演奏」「驚くほど素晴らしい指捌き」とニューヨーク・タイムズ紙に絶賛され、2010年にマンドリン奏者として初めてグラミー賞を受賞した。1978年イスラエル生まれ。これまでにメータ、ヴァンスカ、アントニーニらの指揮で、シカゴ響、ベルリン・ドイツ響、チューリヒ・トーンハレ管などと共演しているほか、ザルツブルク音楽祭にも出演。グラモフォンと専属契約を結び、多くの録音をリリース。読響初登場。

◇10月20日 土曜マチネーシリーズ

◇10月21日 日曜マチネーシリーズ



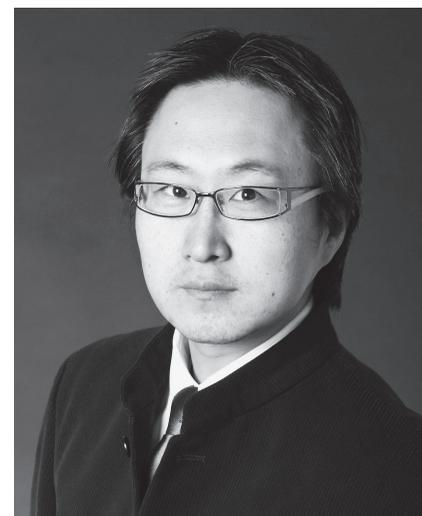
©Shirley Suarez

ソプラノ リディア・トイシャー

Soprano Lydia Teuscher

透き通る美声でオペラやコンサートに活躍するソプラノ。ドイツのフライブルク生まれ。これまでノリントン、コープマン、カンブルラン、ハーディングらの指揮で、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ロンドン響、シカゴ響など世界の一流楽団と共演。オペラでは、ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ザルツブルク・モーツァルト週間、エクサン・プロヴァンス音楽祭、モスクワ・ボリショイ劇場、グラインドボーン音楽祭などで活躍している。読響初登場。

◇10月26日 定期演奏会



©Ribaltaluca

テノール 櫻田 亮

Tenor Makoto Sakurada

伸びやかな歌唱で国際的に活躍する俊英。東京芸術大学大学院修了。イタリア声楽コンクール・シエナ部門大賞、ブルージュ国際古楽コンクール第2位。これまでに鈴木雅明、サヴァリッシュ、ダントーネ、サヴァールらの指揮で、アカデミア・ビザンチナ、ヴェニス・バロック・オーケストラなど国内外の多くの楽団と共演している。オペラではクレモナ音楽祭、エジンバラ音楽祭などで活躍。日本イタリア古楽協会運営委員長として、イタリア・バロック音楽の普及に努めている。二期会会員。東京芸術大学准教授。

◇10月26日 定期演奏会

10.16 [火]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

ハイドン
歌劇〈無人島〉序曲

作曲：1779年／初演：1779年12月6日、エステルハーザ宮廷劇場（ハンガリー）／演奏時間：約8分

交響曲や弦楽四重奏曲で名高いフランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）は、1761年から仕えたハンガリーの貴族エステルハーザ家の当主ニコラウス侯がオペラ好きだったため、当分野にも相当な力を注いだ。生涯に残したオペラ（に類する作品）は20数曲。比較的有名な〈薬剤師〉〈月の世界〉など現存作品の多くは、ウィーンのほど近くに1768年に完成した宮殿「エステルハーザ」で上演するために作曲された。

その一つである〈無人島〉は、1779年に初演された全2幕のイタリア語オペラ。登場人物4人のシンプルかつ引き締まった佳作で、作曲者も「パリやウィーンで上演してくれたら」と望んだ自信作である。物語は、大西洋上の無人島が舞台。「コンスタンツァとジ

エルナンド夫妻は、新婚旅行中に立ち寄った無人島で生き別れになる。ジェルナンドは海賊に捕まり奴隷にされたのだが、妻は捨てられたと思ひ込み、一緒に来ていた自分の妹シルヴィアと共に長年無人島で暮らしていた。すると、海賊から逃れたジェルナンドと奴隷仲間エンリーコが捜索を行い、紆余曲折の末に夫婦は再会。エンリーコとシルヴィアも結ばれる」といったハッピーエンド物である。

序曲は、ト短調の劇的な音楽。シリアスな序奏（ラルゴ）から、主部（ヴァイヴァーチェ・アッサイ）に入ると、いわゆる“疾風怒濤”スタイルの楽想を軸に疾走し、優しい旋律が挟まれる。後半（アレグレット、ト長調）はメヌエット風の優雅な曲調に変化。疾走が戻って終結する。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット、ホルン2、弦五部



©Matthias Heyde

合唱
RIAS室内合唱団

Chorus RIAS Kammerchor

合唱指揮
ジャスティン・ドイル

Chorusmaster
Justin Doyle

©Matthias Heyde

1948年にベルリンの米軍占領地区放送局（RIAS）のために設立。ルネサンスとバロック音楽の歴史的唱法から、様々な特殊な唱法が要求される現代作品まで、幅広いレパートリーを誇る。2017年よりジャスティン・ドイルが芸術監督及び首席指揮者を務めている。ヤーコプス、リープライヒ、ベルリン古楽アカデミー、フライブルク・バロック・オーケストラとは恒常的に共演。また、ラトル、ネゼ＝セガン、ヘンゲルブロックら著名な指揮者と共演している。録音も数多く、グラモフォン賞、エコー賞など受賞多数。

◇10月26日 定期演奏会



©Marco Borggreve

チェロ ハリエット・クリーフ

Cello Harriet Krijgh

卓越した技巧としなやかな感性で聴衆を魅了する新星。1991年オランダ生まれ。2015年に権威ある新人賞“エコー・ライジング・スター賞”を受賞して注目を集めた。これまでにマリナー、ネルソンス、マイスターらの指揮で、フランクフルト放送響、ウィーン放送響、ウィーン響、ベルリン・ドイツ放送響、バンベルク響、ロンドン・フィル、ボストン響などと共演している。ラヴィニア音楽祭、グラウフェネック国際音楽祭にも出演。ユトレヒト国際室内音楽祭の芸術監督を務め、室内楽活動も活発に行っている。

◇11月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

ベートーヴェン ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61

作曲：1806年／初演：1806年12月23日、ウィーン／演奏時間：約42分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が完成した唯一のヴァイオリン協奏曲。交響曲第4番やピアノ協奏曲第4番の創作と同時期の1806年、アン・デア・ウィーン劇場のコンサートマスター、フランツ・クレメントのために、約5週間というベートーヴェンとしては異例の速さで作曲された。初演は同年クレメントの独奏で行われ、直前まで曲が仕上がらなかったにもかかわらず、彼は初見で鮮やかに演奏したといわれている。ただし評判は芳しくなく、真価が認められたのは、1844年に当時13歳のヨアヒムがメンデルスゾーンの指揮で演奏してからのことである。

曲は気品に充ち、晴れやかで牧歌的。テクニカルな名技を前面に打ち出さず、“歌う”楽器としてのヴァイオリンの魅力が、シンフォニックなオーケストラも一体となった壮大な規模で追求されている。その背景にあるのは、名人芸的な協奏曲への反発、恋愛真っ盛りだった当時の心境、クレメントの柔和な個性など。いずれにせよ、大規模かつ温和な音楽でヴァイオリン協奏曲の新境地開拓に挑んだ意欲作である。

ベートーヴェンによるカデンツァは残されていないため、おもにヨアヒム、クライスラー等の作が演奏される。だが、今回用いられるのは、第1、第3楽章ともにオッターヴィオ・ダントーネ(1960～)の作。ダントーネは、アカデミア・ビザンチナの音楽監督でもあるイタリアの指揮者、鍵盤楽器奏者で、本日の独奏者のムローヴァとはバッハの作品で共演している。またムローヴァは、2002年録音のCDでもこのカデンツァを弾いている。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo 冒頭に弱音で刻まれるティンパニの4音が楽章全体を支配する。これは同楽器の画期的な使用例。4連音に続く穏やかな主題と、それに似た上昇・下降する主題を中心に、伸びやかな音楽が綿々と展開される。

第2楽章 ラルゲット 自由な変奏曲形式によるト長調の緩徐楽章。甘美で安らぎに充ちており、ソロと他の独奏楽器(特に木管)の絡みが美しい。切れ目なく第3楽章へ。

第3楽章 ロンド、アレグロ 明るく華やかなフィナーレ。躍動感に充ちた主要主題に二つの副主題が挟まれる。

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ベートーヴェン 交響曲 第2番 ニ長調 作品36

作曲：1802年／初演：1803年4月5日、ウィーン／演奏時間：約32分

1800年に交響曲第1番を完成し初演したベートーヴェンが、その延長線上で生み出した交響曲。1800年のスケッチ帳に第1楽章の主題が姿を見せ、その後も徐々にスケッチが進められた。ただし本格的に作曲されたのは、1802年4～10月、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットにて。10月中にウィーンへ戻って仕上げられ、1803年4月の自主演奏会で初演された。

1802年10月といえば、二人の弟に向けて「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれた時期。耳の病気の悪化が顕著になり、〈月光〉ソナタを捧げたジュリエッタ・グイッチャルディとの失恋も重なった頃の作だが、曲自体は、明るいニ長調を基調とした、エネルギッシュで前向きな音楽となっている。

第1番と同じ2管編成で同タイプの造作ながら、ベートーヴェンはここで一段の進化を見せる。第1楽章の序奏はより長大かつ劇的になり、第2楽章はいっそうロマンティックな情緒を漂わせる。そして、第3楽章に交響曲史上初めてスケルツォを採用。また、管楽器、特にクラリネットの活用が際立ち、従来は同一パートを弾いていたチ

ェロとコントラバスの分離も試みられている。

第1楽章 アダージョ・モルト～アレグロ・コン・ブリオ 序奏は、短調への揺らぎを見せる緊張感を帯びた音楽。主部は、弦楽器が出ず軽快な第1主題、木管楽器とホルンが出ず行進曲風の第2主題を中心に、フレッシュな力感を湛えながら突き進んでいく。

第2楽章 ラルゲット 流麗で優美なイ長調の緩徐楽章。二つの主題を弦楽器が呈示し、第1主題を主体に美しく進行。木管楽器の精妙な用法も効果を発揮する。

第3楽章 スケルツォ、アレグロ 交響曲で「スケルツォ」と表記された初の楽章。主部は、強弱のコントラストが特徴的な主題をもとに、ダイナミックな音楽が展開される。トリオも柔らかに始まるが、すぐに激しさが戻る。

第4楽章 アレグロ・モルト エネルギーに充ちた、ソナタ形式のフィナーレ。前打音が鋭い第1主題(第1楽章の序奏の動機との関連性も指摘されている)と、木管楽器が奏する下行音型の第2主題を軸に、劇的な高揚を遂げる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

10.20 [土]

10.21 [日]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ヴィヴァルディ ドレスデンの楽団のための協奏曲 ト短調 RV577

作曲：不明／初演：不明／演奏時間：約10分

この協奏曲の自筆譜の冒頭には「ドレスデンのオーケストラのために」と記されている。アントニオ・ヴィヴァルディ(1678～1741)は、生地ヴェネツィアで長く活躍した作曲家だが、ドレスデンの宮廷楽団にも作品を提供していた。きっかけとなったのは、1716年にドレスデンから宮廷楽団のメンバーによる室内楽団がヴェネツィアに派遣されたことと考えられる。

そのメンバーの一人が、作曲家としても知られるヴァイオリン奏者、ヨハン・ピセンデル。後にドレスデンの宮廷楽団で楽長となるピセンデルは、9か月にわたってヴェネツィアに滞在して、ヴィヴァルディに師事し、親交を深めた。ピセンデルはヴィヴァルディの協奏曲を多数ドレスデンに持ち帰り、これらを自身のオーケストラのレパートリーに加えることができた。

当代一流の名手といわれたピセン

デルには、こんな逸話が残っている。ヴィヴァルディのある協奏曲を演奏していた際、ヴァイオリンのソロの部分になると、仲間たちがわざとテンポを速めていった。ついに速さについていけなくなったピセンデルは、足を踏み鳴らしてもとのテンポに戻したという。スターの名人芸を試すかのような仲間内の遊び心が伝わってくる。

ドレスデンの宮廷楽団の充実した管楽器パートのために、ヴィヴァルディは独奏ヴァイオリンと弦楽合奏にフルート、オーボエ、ファゴットを加えて作品に豊かな色彩感を与えている。

第1楽章 アレグロ 決然としたメランコリックな主題が奏でられる。

第2楽章 ラルゴ・ノン・モルト オーボエ・ソロによる憂愁を帯びた主題にファゴットが寄り添う。

第3楽章 アレグロ 名技に彩られた活気あふれるフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、通奏低音、弦五部、独奏ヴァイオリン

ヴィヴァルディ マンドリン協奏曲 ハ長調 RV425

作曲：1725年／初演：不明／演奏時間：約7分

マンドリンのために書かれた作品で、これほどよく耳にする曲はないだろう。ダスティン・ホフマン主演による映画『クレイマー、クレイマー』(1980年日本公開)のテーマ曲として一世を風靡し、その後、テレビCM等でもたびたび使用される人気曲となっている。

数百曲もの協奏曲を書いたヴィヴァルディだが、一つのマンドリンのための協奏曲はこの一曲が残されるのみ

(後に二つのマンドリンのための協奏曲を書いた)。弦楽器はすべてピツィカートで演奏してもよいと指定されている。

第1楽章 アレグロ 同音反復が特徴的な愛らしい主題が印象的。

第2楽章 ラルゴ 淡々とした夢想的な緩徐楽章。

第3楽章 アレグロ 優美で朗らかなフィナーレ。小気味よい独奏マンドリンと総奏が穏やかに対話する。

楽器編成／通奏低音、弦五部、独奏マンドリン

ヴィヴァルディ リコーダー協奏曲 ハ長調 RV443

※演奏順はバッハのマンドリン協奏曲の次です。

作曲：不明／初演：不明／演奏時間：約12分

ヴィヴァルディのニックネームは「赤毛の司祭」。聖職者になるための教育を受けて司祭に叙任されたが、この仕事に熱意を傾けることはなかった。ピエタ養育院でヴァイオリン教師に任用されると、ヴィヴァルディは長きにわたって同施設の少女たちの音楽教育と、施設の演奏会用器楽曲の作曲に携わることになる。才能に恵まれた孤児たちからなる養育院のオーケストラ

は、巧みな演奏によって評判を呼んだ。おそらくこのリコーダー協奏曲やマンドリン協奏曲も、養育院での演奏会のために書かれたのだろう。

第1楽章 アレグロ 独奏リコーダーが軽やかに飛翔する。

第2楽章 ラルゴ オペラ・アリア風の情感豊かな嘆きの歌。

第3楽章 アレグロ・モルト 技巧的なフィナーレ。上機嫌で曲を閉じる。

楽器編成／通奏低音、弦五部、独奏リコーダー

J. S. バッハ マンドリン協奏曲 ニ短調 BWV1052

作曲：1738年頃／初演：不明／演奏時間：約24分

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685～1750)のBWV1052といえば、チェンバロ協奏曲第1番ニ短調として知られている。これを本日の独奏者アヴィ・アヴィタルがマンドリン用に編曲して演奏する。

1729年、バッハはテレマンが創設したライブツィヒの楽団、コレギウム・ムジクムの指導を任せられることになった。学生やアマチュア、職業音楽家からなるこの楽団は、ゴットフリート・ツィンマーマンが経営するコーヒーハウスで公開の演奏会を開いた。その際に重要なレパートリーとなったのがチェンバロ協奏曲である。

バッハが残したチェンバロ協奏曲(現代ではピアノ協奏曲として演奏されることも少なくない)は、その大半が旧作からの編曲である。チェンバロ協奏曲第1番は、消失したヴァイオリン協奏曲からの編曲ではないか、と推測されてきた。まずバッハの息子カール・フィリップ・エマヌエル・バッハがチェンバロ協奏曲として編曲し、おそらくコレギウム・ムジクムのコンサートで披露した後、あらためて父バ

ッハがこれを編曲し直している。

同曲から失われたヴァイオリン協奏曲を復元して演奏する試みがあるが、アヴィタルはこの復元版について「マンドリンとともに調和がとれている」と感じ、「ヴァイオリンのための曲を調弦が同じマンドリンで弾くことは、理にかなっている」と語っている。さらに、マンドリンはチェンバロと同じ撥弦楽器として共通する響きの性質を持っている。そこで、アヴィタルは作品を入念に調べて、「チェンバロ版とヴァイオリン版の間に位置する」編曲を書いたという。また、アヴィタルはバッハの音楽には楽器に依存しない普遍性がある、とも述べている。

第1楽章 アレグロ ドラマティックなユニゾンの主題で開始され、突風に煽られるようなソロが加わり、緊迫感あふれる楽想を展開する。

第2楽章 アダージョ ゆっくりと歩むように、愁いを帯びた主題が切々と奏でられる。

第3楽章 アレグロ 弾むように開始される推進力に富んだフィナーレ。ソロの華麗な妙技が披露される。

楽器編成／通奏低音、弦五部、独奏マンドリン

ハイドン 交響曲 第100番 ト長調 〈軍隊〉

作曲：1793～94年／初演：1794年3月31日、ロンドン／演奏時間：約24分

モーツァルト、ベートーヴェンと並ぶウィーン古典派を代表する作曲家、ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)は、生涯に100曲を超える交響曲を作曲している。なかでも晩年に書かれた12曲の交響曲、通称「ロンドン交響曲」(または「ザロモン交響曲」)は傑作として名高い。この〈軍隊〉もその一つ。トルコの軍楽隊を思わせるトライアングル、シンバル、大太鼓が加わる異例の楽器編成が、愛称の由来となっている。

長年にわたってハンガリーの名門エステルハージ家の楽長を務めたハイドンだが、熱心な音楽愛好家であったニコラウス侯が世を去って、音楽への関心が乏しいアントン侯が跡を継ぐと、ハイドンはほとんど肩書だけの楽長になってしまう。そんなハイドンを興行師ザロモンがロンドンへと招いた。ハイドンは、ザロモン主催の連続演奏会で交響曲第100番〈軍隊〉他の新作交響曲を披露して、空前の大成功を収めることになった。2度にわたる渡英は、ハイドンにエステルハージ家での約20年分にも匹敵する報酬をもたらし

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル)、弦五部

たという。

第1楽章 アダージョ～アレグロ 物語の前口上のようなゆったりとした序奏で開始され、フルートとオーボエによる軽快な主題が主部を導く。提示部をリピートした後、2小節の全休符による沈黙をはさんで一瞬、「あれ?」と戸惑わせるのがハイドン流のユーモア。緊密で躍動感あふれる楽想が展開される。

第2楽章 アレグレット いかにも優雅な気品の漂う主題で始めておきながら、トライアングル、シンバル、大太鼓の軍楽隊が乱入して平穩を打ち破る。終結部では軍隊ラッパが鳴り響く。相反する二つの性格が同じ主題を彩るおもしろさ。

第3楽章 メヌエット、モデラート 明るく晴れやかなメヌエットの間に、木の葉が舞い落ちるような付点リズムのトリオがはさまれる。

第4楽章 プレスト 茶目っ気のある主題で開始され、力強さを増しながらスリリングなフィナーレを築く。終盤にふたたび軍楽隊の楽器が加わって、にぎやかに煽り立てる。

澤谷夏樹 (さわたになつき)・音楽評論家

J. M. クラウス

教会のためのシンフォニア ニ長調 VB146

作曲：1789年／初演：1789年3月、ストックホルム、大聖堂（ニコライ教会）／演奏時間：約9分

モーツァルトの同時代人と言えば、先輩世代のハイドン兄弟やサリエリ、後輩世代のベートーヴェンらの名前が真っ先にあがるだろう。だが、知名度こそ彼らに劣るものの、ヨーゼフ・マルティン・クラウス（1756～92）ほどモーツァルトの同時代人と呼ぶにふさわしい作曲家はいない。

クラウスはドイツで生まれ、スウェーデンで没した。生没年はモーツァルトとほぼ同じ。音楽のスタイルも両者でよく似ていることからクラウスは、「スウェーデンのモーツァルト」とあだ名される。なかでも教会のためのシンフォニアは、ふたりの同時代性を強く感じさせる作品だ。

1781年にクラウスは、ストックホルムの宮廷楽団に奉職。翌年、グスタフ3世によって欧州各国に派遣され、最新の音楽を学ぶ。帰国後の88年に宮廷楽長に就任。仕事の一環として国家

行事用の音楽を書いた。教会のためのシンフォニアもその一つ。1789年のスウェーデン国会の開会式のために、これを作曲した。この開会式が大聖堂でおこなわれたこと、音楽が典礼曲を思わせるフーガ風の作りであることから、タイトルに「教会のための」というただし書きが付いたと考えられる。

音楽はゆったりとした序奏と、テンポの速い主部との二部構成。主部は前述の通りフーガ風で、ソナタ形式をとる。このフーガとソナタ形式とを重ねる試みに、モーツァルトとの同時代性が色濃く映る。〈ジュピター〉の終楽章でモーツァルトは、フーガとソナタ形式とを融合させた。ハイドンの弟ミヒャエルも交響曲で、フーガ風の終楽章を手掛けたが、モーツァルトはそれを手本にしたとされる。こうした同時代の音楽の網目に、クラウスの教会のためのシンフォニアも入っている。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

モーツァルト

交響曲 第39番 変ホ長調 K.543

作曲：1788年6月26日完成、ウィーン／初演：不明／演奏時間：約29分

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、交響曲第39番変ホ長調を1788年の夏、他の2曲、つまり第40番ト短調と第41番ハ長調とともに書き上げた。かつてはモーツァルトが芸術的欲求からこれらを作曲したとされていたが、最近では「ロンドンへの演奏旅行のため」「ウィーンでの演奏会のため」「楽譜出版のため」といった仮説が唱えられている。

その中でもとりわけ、楽譜出版説に強い説得力がある。当時、モーツァルトの周囲の作曲家、ヨーゼフとミヒャエルのハイドン兄弟やコジェルフらが、交響曲を3曲セットにして出版していた。モーツァルトはこうした先達に刺激を受けたとも言われる。

3曲は作曲者の生前には演奏されなかった、とする考え方も修正を迫られている。というのも、第40番に複数の稿が残されているからだ。モーツァルトは作品を舞台に掛け、修正の必要が生じたときしか改訂をおこなわなかった。だから第40番はまず間違いなく演奏された。とすると、第39番も第41番も、なんらかの機会に披露さ

楽器編成／フルート、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

れた可能性は大いにある。

第1楽章 アダージョ～アレグロ 力強くゆったりとした序奏と、柔和で軽快な主部とが、滑らかに下行する音階を通して呼応する。この音階が全楽章を束ねるかすがいとして働く。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 付点リズムの組み換えが面白いロンド主題を、起伏あるエピソードでつないでいく。モーツァルトは第1楽章にひんぱんに使った滑らかな音階を、布を縫うようにジグザグに進む音型に改め、この楽章にも登場させている。

第3楽章 メヌエット、アレグレット 民俗舞踊レントラーの楽想が楽しいメヌエット。飛び石を跳ぶように上行する音型が、第1楽章の滑らかに下行する音階と対照をなしている。

第4楽章 アレグロ 第1楽章の滑らかな下行音階を、もともとの形のまま再登場させ、作品の一体感を最後まで持続させる。裏拍を強調したリズム打ちやシンクペーションが、楽章全体をエネルギーに推し進めていく。

メンデルスゾーン オラトリオ〈キリスト〉 作品97

作曲：1846～47年（未完）／初演：1852年9月、イギリス・バーミンガム／演奏時間：約21分

フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ(1809～47)はその晩年、演奏でも作曲でも、大規模音楽曲のオラトリオに積極的に取り組んだ。1846年の初夏にはアーヘンで、ハイドンの〈天地創造〉やヘンデルの〈アレクサンダーの饗宴〉^{キョウアン}を指揮、同じ年の晩夏にはバーミンガムで、書き上げたばかりの〈エリヤ〉を自演した。その後、出版を目指して同作品の改訂に取り掛かった。

メンデルスゾーンは同じころ、〈パウロ〉〈エリヤ〉に次ぐ3番目のオラトリオとして、〈地上、地獄、天国〉に着手する。プロイセンの外交官ブンゼンの構想と台本にしたがい筆を進めたが、同作品を書き上げるには到らなかった。かろうじて完成したのは、「地上」の部に属する二つの場面だけ。作曲家の死後、この二つの場面のみオラトリオ〈キリスト〉として出版された。

第1部 キリストの誕生 ベツレヘムに生まれたイエスを、東方の三博士が訪問するシーン。ソプラノの“ナレーション”のち、男声の三重唱が三博士に扮して登場し、星に導かれてやっ

て来た、と声をそろえる。続いて合唱が「ヤコブの星」の出現を歌い、やがてコラール(教会讃美歌)「なんと美しく輝く暁の星!」に到る。ニコライの1597年の詩と旋律とに基づき、シュレーゲルが19世紀に再編したコラールを、ブンゼンがさらに改稿して台本に取り入れた。

第2部 キリストの受難 ユダヤ人の指導者によって逮捕されたキリストが、ピラトの前に立ち、裁判を受ける場面。テノールによる“狂言回し”と、合唱による“ユダヤ人指導者層”とが交互に現れ、イエスを十字架へと追い詰める。合唱が「シオンの娘たちよ」と呼びかけたのち、コラール「彼はみずからの背に負われる」を歌う。旋律はイザークの〈インスブルックよ、さらば〉。前段の詩はゲルハルト作の「おお世界よ、見よ」の第5節(1844年の『ライプツィヒ教会讃美歌集』に基づくので、ゲルハルトの原作と異なる)を一部、書き換えたもの。後段の詩は同じくゲルハルト作の「今やすべての森は憩う」の第2節。

(歌詞対訳：24～25頁)

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独唱(ソプラノ、テノール、バス2)、合唱

メンデルスゾーン 詩篇 第42番〈鹿が谷の水を慕うように〉 作品42

作曲：1837年(初稿)、1838年(最終稿)／
初演：1838年1月1日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス(初稿)／演奏時間：約26分

「詩篇」は『旧約聖書』に収められた詩集。150篇の詩からなる。それらは神への讃美・感謝・信頼などを内容とする。そのうちもっとも多いのは嘆願の詩だ。詩篇第42番〈鹿が谷の水を慕うように〉もそのひとつ。メンデルスゾーンはこの第42番に音楽をつけ、一編のカンタータとして世に送り出した。

作曲は1837年。メンデルスゾーンはこの年、セシル・ジャンルノーと結婚し、ふたりで南西ドイツへ新婚旅行に出かけた。その滞在先で〈詩篇第42番〉を書いた。同年、ライプツィヒで初稿を完成させ、翌年初めに初演。その年の春に初稿を改訂し、最終稿とした。詩はルターのドイツ語訳に基づく。作曲に際しメンデルスゾーンは、第7節の後半、第10節の第1行、第11節全体を削除。第7節(第5曲)の第1行を第10節の冒頭(第6曲の中ほど)で繰り返し、第12節(終合唱)の最後に神を讃美する言葉を付け加えた。

第1曲 合唱 「わたしの魂も、神よ、あなたに向かって声をあげます」を曲の最終盤に無伴奏で示し、詩人の嘆願

の気持ちを強調する。

第2曲 アリア オーボエの助奏をともないソプラノがアリアを独唱する。

第3曲 叙唱(レチタティーヴォ)と合唱 ソプラノの叙唱ののち、合唱が「祭りに集う人の群れ」として登場する。

第4曲 合唱 第1曲同様、「どうしてうなだれるのか、わたしの魂よ」を無伴奏とし、嘆きを強調する。

第5曲 叙唱 第4曲から続けざまに、「神よ、わたしの魂はみずからの内に沈みます」と歌うソプラノの叙唱に入る。

第6曲 五重唱 ソプラノに、テノールとバスをふたりずつ加えた五重唱。詩前半の感謝の歌を男声陣が、後半の嘆きの歌をソプラノが担当。両者が交互に現れるが、最終的に「主に向かって／神よ」の呼びかけが重ねられ、感謝と嘆きとが融合する。

第7曲 終合唱 第4曲の詩と音楽を引き継いだのち、讃美の詞章を古式ゆかしくポリフォニーで紡ぐ。最後に「とこしえまで」の言葉を長い音符で象徴的に描き、曲を閉じる。

(歌詞対訳：26頁)

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独唱(ソプラノ、テノール2、バス2)、合唱

Erster Teil »Die Geburt Christi«

Rezitativ (Sopran):

Da Jesus geboren war zu Bethlehem im jüdischen Lande, da kamen die Weisen vom Morgenlande gen Jerusalem und beteten ihn an.

Terzett (Tenor, Bass I, Bass II):

»Wo ist der neugeborne König der Juden? Wir haben seinen Stern gesehen und sind gekommen, ihn anzubeten.«

Chor: Es wird ein Stern aus Jakob aufgehen und ein Scepter aus Israel kommen, der wird zerschmetterten Fürsten und Städte.

Choral:

Wie schön leuchtet der Morgenstern!
O welch' ein Glanz geht auf vom Herrn,
uns Licht und Trost zu geben!
Dein Wort, Jesu, ist die Klarheit,
führt zur Wahrheit und zum Leben.
Wer kann dich genug erheben?

Zweiter Teil »Das Leiden Christi«

Rezitativ (Tenor):

Und der ganze Haufe stand auf und fing an, ihn zu verklagen und zu schmähen:

Chor: »Diesen finden wir, dass er das Volk abwendet und verbietet, den Schoss dem Kaiser zu geben, und spricht, er sei Christus, ein König!«

Rezitativ (Tenor):

Pilatus sprach zu den Hohenpriestern und zum Volk: »Ich finde keine Ursach' an diesem Menschen.« Da schriean alle:

Chor: »Er hat das Volk erregt damit, dass er gelehret hat hin und her im ganzen Lande, und hat in Galiläa angefangen bis hierher.«

第1部「キリストの誕生」

レチタティーヴォ (ソプラノ):

イエスがユダヤの地ベツレヘムでお生まれになったとき、東方の博士らがエルサレムにやって来てこう言った。

三重唱 (テノール、バス I, バス II):

「どこですか、新しくお生まれになったユダヤ人の王は。わたしたちはその方の星を見たので、拝みに来たのです」

合唱: 星がひとつヤコブより出でて、王^{おうしやく} 笏がひとつイスラエルからやって来る。彼は領主らと街々を滅ぼすだろう。

コラール:

なんと美しく輝く暁の星!
主より届くはどれほどの輝き、
主はわたしたちに、光と慰めとを与える!
イエスよ、あなたの言葉には一点の曇りもなく、
それは真理と生命とに通じる。
誰があなたと肩を並べられよう。

第2部「キリストの受難」

レチタティーヴォ (テノール):

すると、人々がこぞって立ち上がり、イエスを捕え、裁判に引きずり出して罵りながら言った。

合唱: 「この者は民衆を惑わし、皇帝に税を納めるのを妨げた上、自分が王でありキリストであると称しています」

レチタティーヴォ (テノール):

ピラトは祭司長と人々に向けて言った。「わたしはこの人物になんらの告発事由も見出せない」と。すると人々はこう言い張った。

合唱: 「この者はユダヤ全土、つまりガリラヤからここ(エルサレム)まで、民衆を攪乱してまわっています」

Rezitativ (Tenor):

Pilatus aber sprach: »Ich finde keine Schuld an ihm, darum will ich ihn züchtigen und loslassen.« Da schrie der ganze Haufe:

Chor: »Hinweg mit diesem, hinweg, und gib uns Barrabam los!«

Rezitativ (Tenor):

Da rief Pilatus abermals zu ihnen und wollte Jesum loslassen, sie aber schriean:

Chor: »Kreuzige, kreuzige ihn!«

Rezitativ (Tenor):

Pilatus spricht zu ihnen: »Nehmet ihr ihn hin und kreuziget ihn, denn ich finde keine Schuld an ihm.«

Chor: »Wir haben ein Gesetz, und nach dem Gesetz soll er sterben, denn er hat sich selbst zu Gottes Sohn gemacht.«

Rezitativ (Tenor):

Da überantwortete er ihn, dass er gekreuzigt würde. Sie nahmen Jesum und führten ihn hin zur Schädelstätte. Es folgte ihm aber nach ein grosser Haufe Volks, und Weiber, die klagten und beweineten ihn.

Chor: Ihr Töchter Zions, weint über euch selbst und über eure Kinder. Weint über euch selbst! Denn siehe, es wird die Zeit kommen, da werdet ihr sagen zu den Bergen: Fallt über uns! und zu den Hügeln: Deckt uns!

Choral:

Er nimmt auf seinen Rücken die Lasten, die mich drücken bis zum Erliegen schwer, Er wird ein Fluch, dagegen erwirbt er mir den Segen, und o wie gnadenreich ist der!

Wo bist du, Sonne, blieben?
Die Nacht hat dich vertrieben,
die Nacht, des Tages Feind.
Fahr' hin, du Erden Sonne,
wenn Jesus, meine Wonne,
noch hell in meinem Herzen scheint.

レチタティーヴォ (テノール):

しかし、ピラトは言った。「わたしはこの者に(死に値する)罪を見出せない。よって懲らしめて釈放することとする」と。人々はみな、こう叫んだ。

合唱: 「こいつを(刑場に)やれ、バラバを釈放しろ!」

レチタティーヴォ (テノール):

ピラトは改めて人々に、イエスを釈放すると告げた。しかし、彼らは叫んだ。

合唱: 「十字架に、こいつを十字架につけろ!」

レチタティーヴォ (テノール):

ピラトは人々に「それでは自分たちでこの者を引き取り、十字架につけよ。わたしはこの者に罪を見出せない」と述べた。それに答えて人々は言った。

合唱: 「わたしたちには律法があります。それに基づけば、彼は死に値します。神の子と自称したからです」

レチタティーヴォ (テノール):

そこでピラトは、十字架につけるためイエスを人々に引き渡した。人々はイエスを引き取り、ゴルゴタの丘へと連れて行った。多くの男女が嘆き悲しみつつ、イエスにつき従った。

合唱: シオンの娘たちよ、みずからのために、またお前たちの子らのために泣きなさい。なぜなら見よ、山に向かって「わたしたちの上に崩れ落ちよ」と、丘に向かって「わたしたちを覆い隠せ」と言う日がやがて来るのだから。

コラール:

彼はみずからの背に負われる、
わたしにのしかかる、
耐えきれないほどの重荷を。
人は彼をあざけるのに、
彼はわたしを祝福する、
ああ、なんと慈悲深いお方よ!

太陽よ、どこにいった。
夜がお前を追い出してしまった、
夜、それは昼の敵手。
地の太陽よ、さらば、(お前がいなくとも)
わたしの喜び、イエスが、
今なお心に明るく輝く。

訳：澤谷夏樹

Chor: Wie der Hirsch schreit nach frischem Wasser,
so schreit meine Seele, Gott, zu Dir.

Arie (Sopran):

Meine Seele dürstet nach Gott,
nach dem lebendigen Gotte,
wann werde ich dahin kommen
dass ich Gottes Angesicht schaue?

Rezitativ (Sopran) und Chor:

Meine Tränen sind meine Speise Tag und Nacht,
weil man täglich zu mir sagt:
Wo ist nun dein Gott?
Wenn ich des inne werde,
so schütte ich mein Herz aus bei mir selbst;
denn ich wollte gerne hingehen mit dem Haufen
und mit ihnen wallen zum Hause Gottes
mit Frohlocken und Danken unter dem Haufen
derer, die da feiern.

Chor: Was betrübst du dich, meine Seele,
und bist so unruhig in mir?
Harre auf Gott!
denn ich werde ihm noch danken,
daß er mir hilft mit seinem Angesicht.

Rezitativ (Sopran):

Mein Gott, betrübt ist meine Seele in mir;
darum gedenke ich an dich.
Deine Fluten rauschen daher,
daß hier eine Tiefe und da eine Tiefe brausen;
alle deine Wasserwogen und Wellen gehen über
mich.

Quintett (Sopran, Tenor I, II, Bass I, II):

Der Herr hat des Tages verheißen seine Güte,
und des Nachts singe ich ihm
und bete zu dem Gott meines Lebens.
Mein Gott, betrübt ist meine Seele in mir;
Warum hast du meiner vergessen?
Warum muß ich so traurig gehen,
wenn mein Feind mich drängt?

Chor: Was betrübst du dich, meine Seele,
und bist so unruhig in mir?
Harre auf Gott!
denn ich werde ihm noch danken,
daß er meines Angesichts Hilfe und mein Gott ist.
Preis sei dem Herrn, dem Gott Israels,
von nun an bis in Ewigkeit!

合唱：鹿が清新な水をあえぎ求めるように、
わたしの魂も、神よ、あなたに向かって声をあげます。

アリア (ソプラノ):

わたしの魂は神に、
生ける神に飢えています。
わたしはいつ
神の御顔を見にいくのでしょうか。

レチタティーヴォ (ソプラノ) と合唱:

涙は昼も夜もわたしの糧、
人々が来る日も来る日も
「お前の神はどこだ」と言うからです。
わたしは (次のことを) 思い起こして、
みずからの心のうちを自分自身に打ち明けます。
祭りに集う人の群れとともに行き
彼らと一緒に神の家を詣で
喜びと感謝の声をあげたことを。

合唱：どうしてうなだれるのか、わたしの魂よ、
なぜ落ち着きをなくすのか。
神を待ち望みなさい。
いずれ神に感謝することになる、
その御顔でわたしを救ってくださると。

レチタティーヴォ (ソプラノ):

神よ、わたしの魂はみずからの内に沈みます。
だからわたしは、あなたを思い起こすのです。
あなたの洪水は轟きつつ流れます、
というのも深みのあちこちが荒れ狂っているからです。
あなたの大波がみな打ち寄せ、わたしを越えていき
ます。

五重唱 (ソプラノ, テノール I, II, バス I, II):

昼、主が御恵みを約束してくださったので、
夜、わたしは主に向かって歌を歌い
わたしのいのちの神に祈りをささげます。
神よ、わたしの魂はみずからの内に沈みます。
あなたはなぜ、わたしをお忘れになったのですか。
わたしはなぜ、悲しみつつ行かねばならないのですか、
敵がわたしを押しつける中を。

合唱：どうしてうなだれるのか、わたしの魂よ、
なぜ落ち着きをなくすのか。
神を待ち望みなさい。
いずれ神に感謝することになる、
彼こそわたしの顔の助け、わたしの神である、と。
イスラエルの神、主をたたえよ、
今しよりとこしえまで。



11.23 [金・祝]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ニールセン
歌劇〈仮面舞踏会〉序曲

作曲：1904～05年／初演：1906年11月11日、コペンハーゲン／演奏時間：約5分

デンマークの作曲家カール・ニールセン (1865～1931) は、フィンランドのシベリウスと同じ年に生まれた。第1番から第6番までの6曲の交響曲で作曲家として地位を確立するが、若き日は、コペンハーゲン王立劇場管弦楽団のヴァイオリン奏者として活躍し (1889～1905)、1908年からは同管弦楽団の第2指揮者を務めた。

〈仮面舞踏会〉は、作曲に専念するために管弦楽団を退職する前年に着手された。ニールセンにとって2作目となるオペラで、ホルベアの同名の喜劇 (1724) をもとに書かれたヴィルヘルム・アンデルセンの台本による全3幕の喜歌劇である。

舞台は、1723年のコペンハーゲン。青年レアンダーは、仮面舞踏会で名も知らない娘と出会って恋に落ち、結婚を誓った。一方、父親は息子のためにすでに結婚相手を決めていた。それに

逆らってレアンダーは仮面舞踏会に出かけ、許嫁の父親に見つかってしまう。しかし、その父親の娘レオノーラこそ、レアンダーが愛する相手で、運命づけられた二人はめでたく結ばれる。

このオペラは、1906年に王立歌劇場で初演されると大成功を収め、ニールセンは一夜にしてデンマークの国民的作曲家となった。舞曲のリズムを多用した華やかな音楽、二重唱や合唱の生き生きとした表現など、のちにデンマークで最も成功したオペラであり、20世紀の最も魅力的な喜歌劇のひとつと位置づけられた。幕開きの序曲 (アレグロ・マ・ノン・タント、二長調) は、推進力に富む弦楽器と表情豊かな管楽器による活発な音楽で、2拍子の舞曲風の間部をはさむ。もつれた人間関係が解かれる第3幕の音楽も含まれ、最後はテンポを速め、力強く突き進む。

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル)、弦五部

エルガー チェロ協奏曲 ホ短調 作品85

作曲：1918～19年／初演：1919年10月27日、ロンドン／演奏時間：約30分

エドワード・エルガー（1857～1934）は、17世紀のパーセル以来、長らく不在だったイギリス音楽界に登場した大作曲家で、その音楽は国民から広く愛された。正規の音楽教育はほとんど受けなかったが、若い頃は教会のオルガニストやヴァイオリン教師などをして働きながら作曲を続け、創作活動を本格化させたのは、32歳で結婚してからであった。しばらくして地方の音楽祭のために書いた合唱曲で名をあげると、〈エニグマ変奏曲〉（1899）で大きな成功を収め、オラトリオ〈ゲロンティアスの夢〉（1900）によって作曲家としての地位を確固たるものとした。

チェロ協奏曲は、エルガーが書いた最後の大規模な作品である。第一次世界大戦が終結した頃から、精神的にも体調面でも不調だったエルガーは、静養も兼ねて郊外の邸宅に移り住んだ。田舎の生活で平穏を取り戻し、着手した新しい協奏曲は、途中、室内楽曲を3曲手がけたため中断したが、1919年初夏に完成した。初演は、サルモンドの独奏と、作曲者自身が指揮するロンドン交響楽団によって行われた。全体

は4楽章構成で、どの楽章でも独奏チェロのレチタティーヴォ（語り）が、音楽を導き出す役割を果たしている。
第1楽章 アダージョ～モデラート、ホ短調 「ノビルメンテ（高貴に）」と指示された独奏チェロが重音を多用する荘重な導入に続いて、主部では、静かに揺れ動く第1主題と木管に導かれる甘くはかない第2主題が提示される。独奏チェロは休みなく主題を繰り返し、静かなまま切れ目なく第2楽章へ。
第2楽章 レント～アレグロ・モルト、ト長調 独奏チェロのピッツィカートのアルペジオが休止をはさみ16分音符の動機と交替した後、16分音符の動機による技巧的な主題が快速に進む。
第3楽章 アダージョ、変ロ長調 ロマンティックな緩徐楽章。独奏チェロが美しい旋律を次々と歌い上げる。
第4楽章 アレグロ～モデラート～アレグロ、マ・ノン・トロポ～ポコ・ビウ・レント、ホ短調 力強い管弦楽に独奏チェロのカデンツァが続く。チェロの技巧が存分に発揮され、これまでの楽章の主題が回想され、最後は第1楽章の冒頭部が再現される。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

シベリウス 交響曲 第1番 ホ短調 作品39

作曲：1898～99年、1900年改訂／初演：1899年4月26日、ヘルシンキ／演奏時間：約38分

長らくスウェーデンの属領だったフィンランドは、1809年に帝政ロシアに割譲され、その支配下に置かれた。19世紀は、ヨーロッパの多くの地域で民族主義運動が勃興したが、フィンランドも例外ではなく、19世紀末から1917年に独立するまで、自治を侵害するロシアからの弾圧が厳しくなった時代に最高潮に達した。それは、ジャン・シベリウス（1865～1957）が作曲家として活動を開始した時期と重なり、彼の愛国的な音楽は、民衆の心をつかみ、民族主義の熱いうねりとともに、国民的作曲家としての地位を確立させた。

交響曲第1番は、交響詩〈フィンランド〉（1899）と同時期に作曲された。留学先のベルリンやウィーンで触れたドイツ・ロマン派の音楽や、ヘルシンキで演奏されたチャイコフスキーの交響曲第6番〈悲愴〉の影響が濃厚に見られるが、北欧の民俗舞曲のような素朴さや寂寥感を滲ませた響きも盛り込まれている。古典的な2管編成だが、巧みなオーケストレーションで色彩豊かな音楽を作り上げている。

第1楽章 アンダンテ・マ・ノン・トロ

ッポ、ホ短調～アレグロ・エネルジーコ ティンパニの連打を背景にクラリネットがしみじみと歌う序奏に続いて、ソナタ形式の主部では、3連符が特徴的な力強い第1主題が広がり、フルートの軽快な主題を経て、オーボエの瞑想的な第2主題が現れる。

第2楽章 アンダンテ（マ・ノン・トロポ・レント）、変ホ長調 弦楽器が弱音で穏やかな旋律を示し、木管楽器によるフガート風の主題がはさまれる。変イ長調の中間部は、4本のホルンのアンサンブルで穏やかに始まる。

第3楽章 スケルツォ：アレグロ、ハ長調 低弦楽器の刻みが導く濃厚なスケルツォと木管が中心の牧歌的なトリオ（レント、ホ長調）が交替する。

第4楽章 フィナーレ（幻想曲風に）：アンダンテ、ホ短調～アレグロ・モルト 第1楽章の序奏主題が弦楽器で力強く再現され、ソナタ形式の主部では、木管のリズミカルな第1主題と弦楽器のゆっくりとした広がりのある美しい第2主題が劇的に展開する。最後は、第1楽章と同様に、二つのピッツィカートで静かに終わる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、ハーブ、弦五部